

「天朝」としての中国共産党

「天朝観念」は大清帝国の崩壊とともに消滅し、以来百年以上の時間が経過している。しかし、習近平へのますます強まる一強体制下の中国共産党のありようをみていると、天朝観念は今なおはっきりと現存のものだといわねばならない。

現在の天朝は中国共産党幹部の牙城・中南海にある。共産党の権力中枢が七名の政治局常務委員であり、その外縁を二〇名近い政治局委員が固める。この二〇数名の権力中枢はすべて習派と呼ばれる習近平にきわめて近い人々からなる集団であり、反習的な人物は誰もいない。習近平一強体制であり、権力中枢部においてかつて一般的であった集団指導体制は完全に崩れている。習近平は過去のいづれの王朝の皇帝をも凌ぐ強権をもって天朝を牽引する皇帝であり、政治局常務委員、政治局委員は紛れもなくその「臣下」である。そのうえ、習は総書記在任中に憲法改正に臨んでその地位を終身のものとした。いよいよの皇帝である。

この共産党の「天朝化」が二〇〇〇年代に入って

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

「中国崛起」といわれるこの国の経済的膨張、軍事的拡張の時期にいたって一段と顕著なものとなっている。「天朝」観念においては他国との対等な外交関係、勢力均衡といった考えはますます遠ざけられ、周辺諸国との領土紛争に始まり、アメリカ中心の国際秩序への対抗心が強化され、ハンチントンが「文明の衝突」と呼んだ事態に一步近づくことが懸念される。中国の歴史学者・葛兆光氏が『完本・中国再考—領域・民族・文化』(岩波現代文庫)の中で指摘している次の警世に注目する必要がある。

「多くの中国人は根深い『天下主義』と『天朝心情』を抱いている。現在『中国崛起』のスローガンに突き動かされている多くの人々は、近代以来、西側(とくにアメリカ)が世界秩序を主導していることに反感を抱き、『天下主義』『天下システム』あるいは『新天下主義』を声高に叫んでいる」

実際、習近平政権は今後十年の間に中国が「社会主義文化強国」となり、中国に固有の文化を前面に押し出しそうと檄を飛ばしている。